

職朝での校長挨拶 25

おはようございます。この風変わりな職員朝礼も残すところ、今回を入れてあと 2 回となりました。他者と向き合う、自己と向き合う、というお話しでしたね。罪を犯した側も赦す側も自分へのこだわりがあつて罪の告白とその赦しが成立しない。どちらも不安を抱えているため、自己存在への関心が抜けない。罪を犯した側は心からごめんなさいを言うことは自己存在の否定になるから、言えない。赦す側も自分と同じ苦しみ、あるいはそれ以上の苦しみを味わわせないでは済まない。どちらも自己存在への執着は承知していても、自分の意志の力ではどうにもならない。こうして両者は共倒れになります。しかしヘーゲルはそこに「和解の然り」が立ち現れている、と言います。ここから宗教の章が始まります。道徳を超えて宗教が立ち現れるのです。

このことの意味を考えて見たいと思います。まず罪の告白とその赦しは人間の意志の力ではどうにもならない、それは人間を超えた何かに気づかされるという仕方でのみ成立する、ということです。それは例えば相手の内に自己関心を離れた「人間」が見えたときです。罪を犯した側が、被害者の生まれたときから、何に喜び何に悲しんだか、どのように大切に见守られてきたか、そうして最後はどのように死んでいったかを辿ることによって、そこに「人間」を見るとき、心から「済まない」と思うということがあると思います。このように自己関心を離れた「人間」そのもの、「人間」のアイデアが見えたとき、始めて罪の告白も赦しも成立することになります。

この時始めて人間は自分自身にも他者にも向き合うことが出来ます。それによって「人間は人間に対してのみ人間である」という事態が成立し、我々は人間であることが出来るのです。今日はここまでです。本日もよろしく願いいたします。